

かんしま 歴史回廊

第10部・敵島の文化③

平安時代の末期、敵島神社に参詣した藤原氏の貴族がいた。歌人としても著名な徳大寺実定だ。平清盛が信仰した敵島への参詣は「平家物語」では次のように語られる。

（清盛の二男宗盛に感言されて大納言を辞した実定は、家来の領に従い任官祈願で敵島に参詣する。そしてその話が清盛に伝わるまじな主を了した。実定の敵島詣を知った清盛は感動し、嫡子重盛に左大将を辞させ、右大将の宗盛を起して実定を左大将に据えた。

■実定の政治力描く

「公卿補任」によれば、実定は長寛三（一一六五）年に権大納言を辞し、十二年後の三月、大納言、十二月に左大将に任せられた。平家没落後も源朝に信頼され、官位を重ねた。三男公継の参議就任とひきかえに左大臣を辞した翌年の建久二（一一九二）年、

五十三歳で没した。実際の実定の敵島詣では左大将任官後で、大納言辞退の理由も物語とは異なる。しかし、「平家物語」は因果関係を脚色することで、動期を生き抜いた実定の政治力を強く印象付けた。

■建立の理由は不明

敵島神社に隣接する大願寺境内の片隅、地藏堂の横に、人の背丈ほどの石碑がひっそりと立っている。正面に「奉納 内大臣 正二位勲一等 侯爵 徳大寺実則」とある。実則は実定から二十四代後の徳大寺家当主である。幕末に攘夷派貴族として活躍し、明治政府で宮内卿、侍從長、内大臣を歴任。明治天皇崩御まで側近として仕えた功績で公爵に列せられた。

碑奉納の理由や建立年は不明だが、実則は実定と同様、激動期を生き通し栄達を遂げた。その胸中には、七百年余りの時を超え、敵島を舞台にした実定の事績への感謝の念があったに違いない。

碑の実際の建立者は、広島市草津で酒造業を営み、敵島社御用を務めた小泉甚右衛門である。実則のほか、九鬼隆一や杉孫七郎などの政府高官の奉納碑も建立した。そのおかげで、宮島と縁ある人物の事績を今もしのぶことが出来る。

徳大寺実則の碑 縁ある人物 今に伝承

土曜日に掲載します



大願寺境内に立つ徳大寺実則の碑

（樹下文隆・泉立広島大教授）